

高等学校における身近な地域を活用した住教育教材の提案

21218052 松村瞳  
指導者 葉袋奈美子 准教授

住教育 地域教材 グループワーク  
日本史 地理 シティズンシップ

1. 研究の背景と目的

災害が頻発する現代において、地域の地理的特徴を認識し、メリット・デメリットを考慮して上手に自分達の生活に取り込んで暮らす、つまり「賢く暮らす」ことが重要である。市民が賢く暮らすためには、充実した住教育を受けることや、様々な情報を鵜呑みにせず、自ら情報を読み取り、取捨選択できるようになるためのシティズンシップ力の育成が不可欠である。住教育は家庭科や地理歴史科の地理分野で扱われる機会がみられるが、地理歴史科の歴史分野ではほとんど扱われていない。しかし、日本史 B の学習指導要領には『ウ 産業経済の発展と幕藩体制の変容の中の「近世の都市や農山漁村における生活や文化の特色とその成立の背景」』と示され、これに結びつけた住教育を行うことができる。地理歴史教育では地域教材の活用が効果的であるが、教材が少ない等の理由で実施されず、「知識詰め込み型」が主流となり、手を動かす作業が少ない。また、地理を選択できない生徒が増え、地図の読み取りや関心の低下がすすんでいる傾向があることなどから、本研究では日本史 B を中心に、賢く暮らすためのスキルを身に付けるため、生徒が楽しみながら取り組むことのできる、身近な地域の地図を活用した住教育教材を提案する。

研究方法は、2016 年 5 月上旬、神奈川県平塚市内の H 高等学校の 2 年生 54 名を対象に 45 分間の授業を実施し、個人ワークおよびグループワークを通して得られたアンケート結果とワークシートの内容を分析し、賢く暮らすためのスキルを身に付けられたかを検証した。

研究対象として、過去に津波や液状化の被害を受けながらも、昔から多くの人々が暮らし、現在は多くの学生や観光客が訪れる旧須賀村（現 平塚市）は、他の沿岸地域に多く共通する特徴を持ち、また、近くには宿場町が作られ歴史的に重要な地域であったことから、地域教材の対象として適していると考え、須賀村を選定した。

2. 教材の作成

2-1. 学習目標の設定

学習目標を①日本史を中心に、②地理③シティズンシップの内容も含む 3 つに分類し、各分野での目標を、①歴史や文化や地理的特徴を関連させ、当時のむらの様子

を多面的・多角的に考察する②歴史的背景を踏まえ、読図や作図を通して地理的な見方や考え方を身につける③数多くの情報の中から、正確に情報を読み取り、必要なものの取捨選択をし、主体的に学習に取り組む力=参加型民主主義に必要なスキルを身につけると設定した。

2-2. 教材の作成

教材として須賀村資料集とワークシートを作成し、前者の構成を表 1 に、後者の構成を表 2 と表 3 に示す。

須賀村資料集には、須賀村の概要、廻船業の歴史、徳川家との関係、須賀村の地理的特徴が賢く暮らすための手がかりになると考え、記載した。ワークのテーマを「領主になってむらづくりをしよう～賢く暮らすためのよりよいむらづくり～」と設定し、須賀村の領主になったつもりで、この村をさらに繁栄させ、かつ、安全に暮らすためのむらづくりを個人とグループで行う内容にした。アンケートでは授業前後での「自然と向き合った暮らし」についての着眼点の変化、各ページの読み込み具合、授業の感想を問うた。

表 1 須賀村資料集の構成

頁	テーマ	内容 (①:日本史②:地理)
1	須賀村について学ぼう	須賀村の平塚市内での位置確認(①②) 地名の由来からむらの地形を学ぶ(①②)
2	明治の地形図	明治期の地図をみて、当時の様子を想像する(①②) TRY (・等高線を赤色でなぞる・田畑、森林、集落をそれぞれ色分けする)に取り組むことで、地形を読み取り、さらに深くむらの様子を想像できる(②)
3	須賀村の歴史	鎌倉時代からの歴史を通して、須賀村が地理的・経済的・軍事的に重要な地域であったことを学ぶ(①②)
4	須賀村の地形	地形区分や等高線を読み取り、むらの地形を学ぶ(②)
5	須賀村の繁栄	須賀村の繁栄や須賀で暮らしていた人の気性などから当時の暮らしを想像する(①) 須賀の災害過去の災害から甚大な災害が起こりうることを想像させ、個人ワークの Work1 にリンク 須賀村の繁栄&廻船業とは?生業について触れ、個人ワークの Work2 にリンク
6	須賀でとれる魚	須賀でとれた魚の漁獲量や漁法を学ぶ(①)
7	平塚の今昔	須賀の街並みから斜めに伸びる道がつくられた理由を考える。(①②) 江戸時代、須賀村は徳川家と密接な関係があったことを学ぶ(①)

ワークの内容は③のシティズンシップを意識して作成した。平成 25 年度からの新学習指導要領の実施に当たって、文部科学省から高等学校への通知内容<sup>2</sup>に、生徒の思考力・判断力・表現力を育むための具体的な例として付箋を使って話し合うことが記載されている。これは③のシティズンシップ力の育成に適していると考え、ワーク内容に反映させた。

表2 個人ワークシートの構成

Work	内容
Work1	この村で発生すると考えられる災害はどれか その中でどの災害に強いむらにするか
Work2	この村でできる生業はどれか/その中でどの生業を主とするか
Work3	Work1、Work2で挙げたことを考慮した上でどこに住むか
Work4	Work3の理由
Work5	ポストイットにWork1、2、4を記入

表3 グループワークシートの構成

Work	内容
Work1	全員のポストイットを地図に貼る
Work2	よりよいむらにするために採用案と不採用案にわけ
Work3	キャッチコピーとアピールポイントの考案

3. 教育効果の検証

3-1. ワーク結果の検証

個人ワークのWork1、Work2

の関係を表4に示す。津波に強い村にしたいと回答した生徒が38名と過半数を占め、このうち17名が漁業を主の生業にしたいと回答した。これらの生徒の多くは海の利点をうまく自分達の生活に取り入れることが大切だと考え、海に近いが津波が来た場合にはすぐに逃げられる所に住むことを意識していることが分かったことから、ワークを通して、地図を読み取り、地形を意識したことが確認でき、ここでは①②の目標を達成した。

3-2. 着眼点の変化とワークの理解度

授業前後のアンケートであなたにとって「自然と向き合った暮らし」とはどういうことですか?という投げかけをし、どう着眼点が変わるのかを検証した。授業前はエコ・環境問題と回答した生徒が24人(43%)で、自然災害<sup>3</sup>や地域の特性<sup>4</sup>と回答した生徒は6人(11%)のみだったが、授業後はエコ・環境問題と回答した生徒が大幅に減り、自然災害及び地域の特性と回答した生徒が41人(70%以上)と、多くの生徒の着眼点が大きく変化した。(図3)授業を通して、多くの生徒が「自然と向き合った暮らし」とは地域の特性を活かし、安全に暮らすこと、つまり「賢く暮らす」こと、という認識を持てるようになった。

表4 Work1とWork2の関係  
(行方向がWork1、列方向がWork2)

	漁業	稲作	網物	穀物	林業	計
津波	17	12	6	2	1	38
洪水	2	2	0	1	0	5
建物崩壊	2	1	0	0	0	3
土砂災害	0	3	0	0	0	3
火災	2	0	0	0	0	2
液状化	1	0	0	0	1	2
高潮害	1	0	0	0	0	1
計(人)	25	18	6	3	2	54

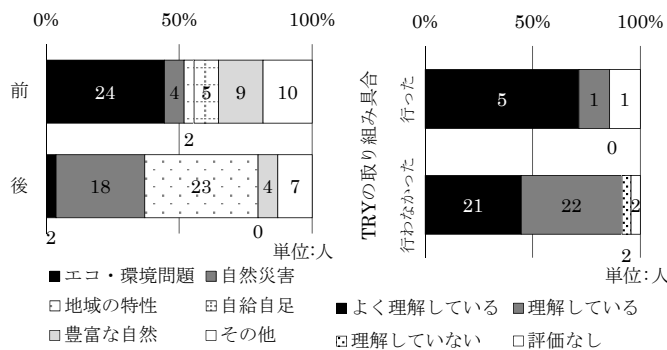


図1 授業前後の着眼点の変化「自然と向き合った暮らし」とはどういうことか

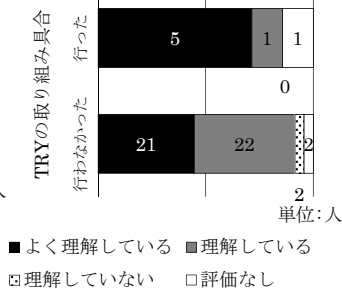


図2 TRYの取り組み具合と理解度の関係

授業後アンケートの内容から、①自然災害②地域の特性の両方を回答したものをA(よく理解している)、①か②のどちらかを回答したものをB(理解している)、①も②もどちらも回答していないものをC(理解していない)、途中退席のものを評価なし、の4つに分類した。A評価の生徒は、地域のメリットだけでなくデメリットを考慮している回答が多くみられた。TRYの取り組み具合と理解度の関係を図2に示す。TRYに取り組んだ生徒の方がそうでない生徒よりよく理解できており、理解できなかった生徒はいなかったことから、TRYは理解度を深めるために有効であると言える。

表5 班毎の理解度  
途中退席の3名は除く

	A	B	C	計
1班	2	4	0	6
★2班	6	0	0	6
3班	3	3	0	6
★4班	3	2	0	5
5班	1	4	0	6
★6班	4	2	0	6
7班	3	2	1	6
★8班	4	2	0	6
9班	0	4	1	5
計(人)	26	23	2	51

★過半数がA

また、グループワークではWork2で各生徒からの案を採用・不採用に分ける作業を行った。採用・不採用それぞれの理由に①場所の特徴②災害への対策に該当する内容がどちらも含まれている班はよく話し合い、須賀村についてよく理解できたと分類する。よく理解できた班は2班と8班のみで、この2つの班の生徒は全員が授業前後での着眼点に変化がみられ、ほとんどの生徒がA評価だった。(表5)積極的に自ら発言をし、班全員がよく話し合い、何が必要なか何が不要でないのかを考える作業では、③の目標を達成した。

3-3. ワークに取り組む態度

今回の授業は補習の時間を利用して行ったため、通常授業とは異なるものだったが、9班を除くほとんどの生徒が意欲的にワークに取り組んでいた。授業後の感想には、自分たちの身近な地域について学べたことやグループワークで皆がそれぞれ違う意見を持っていてそれらをまとめること、普段考えないことを考えることが楽しかったというものが多くみられた。

4. まとめ

多くの生徒が楽しみながらワークに取り組み、図を読み取り、地形を意識できるようになったことから、本教材は、生徒の興味・関心を引き出し、楽しくワークに取り組み、賢く暮らすために必要なスキルを身に付けるものとして、有効であると言える。

<註釈>

- 1) 日本学術会議、「新しい高校地理・歴史教育の創造—グローバル化に対応した時空間認識の育成—」、心理学、教育学委員会・史学委員会・地域研究委員会合同 高校地理歴史科教育に関する分科会、2011.8.3. p.11
- 2) 文部科学省、高等学校等の新学習指導要領の実施に当たって(通知) 2013.4.1に記載されている「1.新しい学習指導要領の趣旨を改めて確認し、その実現に努めること」の中に「確かな学力」として、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うことを重視するものである。とある
- 3) 自然災害に備えること
- 4) 地域の特性を活かすこと
- 5) 主要参考文献  
1) 青藤理、北林健二、「プリントを用いた地域学習の可能性について一定期調査問題を利用した場合—」、山口県立大学学術情報 第7号【国際文化学部紀要 通巻第20号】、2014.3  
2) 文部科学省、「高等学校学習指導要領解説 地理歴史編」、2010.6